表紙の解説　夭折した或る眼科医の記―梅 錦之丞の生涯―

谷 原 秀 信

（「東京大学医学部眼科学教室百年史」より転載）

図　梅 錦之丞

はじめに

「天命」という言葉があります。私は，基本的には運命論者なので，与えられた運命に対して，自分なりの誠実を尽くすことに意味があるのだと思っています。したがって，人生の諸相を勝ち負けや損得で捉えるような浅薄な人生観は，あまり好みません。実際，これまでの人生で遭遇した人には，肩書もなく年齢も若いにもかかわらず，素晴らしい人がおられましたし，立派な肩書を持ちながらも，理念なく矮小化された政治的画策や利益誘導に奔走しているだけのような方も見かけました。ただ，そのような主観的な尊卑も，長い目で見れば，無常なる人の営みの範疇におさまるだけのわずかな相違に過ぎないのかなと思う気持ちもあります。他者の人生における陰影を，自分の視野におさまる限定された一面だけで，短絡的に決めつけるのも憚られますが，少なくとも自分自身については，淡々と自分の価値観に従って生きていたいと思います。

人の運命の中でも，特に，天から与えられた寿命の長短については，無常なる定めを象徴するように感じます。将来を嘱望されながらも，優れた若者が無慈悲にもその命を奪われ，確かにそこに存在していたはずの輝かしい可能性が断ち切られた時，天は人をして世の無常であることを思い至らしめるのかもしれません。今回は，日本近代眼科の黎明期を指導すべき未来を嘱望されながらも，志半ばに夭折した俊英を取り上げます。その先達の名を，梅 錦之丞（**図**）と言います。

「日本近代眼科の父」と呼ばれるはずであった眼科医

日本眼科史を俯瞰した場合，「日本近代眼科の父」という呼称は，東京大学における初代眼科教授であった河本重次郎に対して，用いられることが多いようです。唯一の帝国大学であった当時の東京大学は，日本における最新の西洋医学を輸入するうえでの司令塔でした。本シリーズの初回「森鷗外と北里柴三郎，河本重次郎―学問的対立と学閥，そして友情について―」で取り上げたように，当時の河本重次郎と彼の統率した帝国大学眼科の権威は，絶対的であったと思われます。また全国の主要な大学教授や基幹病院眼科部長のほとんどは，彼の門下であり，その膨大な数に及ぶ門弟の存在からも，河本重次郎が「日本近代眼科の父」の呼称にふさわしいことに異論はないだろうと思います。しかし日本眼科史に燦然と輝く太陽「河本重次郎」の傍には，明けの明星のような「梅 錦之丞」の存在があります。

梅 錦之丞の生涯

梅 錦之丞は，安政5年（1858年），出雲の地に，松江藩（現 島根県松江市）における藩医の次男として誕生します。梅 錦之丞は，幼少より俊英の誉れ高く，明治2年，12歳で藩命により西洋医学を学びます。この年，大阪で官立の浪華仮病院および医学校が開設され，ボードイン，緒方洪庵門下の適塾出身者によって伝習生の教育が始められ，梅はこれに応募しました。その後，明治7年（1874年），東京医学校へ一家で転じました。梅 錦之丞は，明治11年（1878年）11月，東京大学医科大学，改称して東京大学医学部の本科第一回生として卒業し，翌明治12年（1879年）11月，東京大学における最初の医学士となった梅 錦之丞らは，第一回の文部省官費留学生として選ばれ，ドイツに渡ります。そして「東京大学医学部眼科学教室百年史」（増田寛次郎編）によると，明治16年（1883年），ドイツより帰国した梅 錦之丞は，3月24日付で文部省准奏任御用掛を命ぜられ，医学部講師として，第一医院眼科主任となって，6月に一時的に帰国したスクリバ（Julius Karl Scriba）に代わって，眼科学と眼科臨床講義を，日本人として初めて行うようになりました。梅 錦之丞は，屈折学に詳しく，患者に対して必ず視力検査を行い，Snellenの試視力表を初めて使用したと言われています。また明治17年（1884年）には，医学部別課生213人から，色盲4人を見つけたという記録が残っています。梅 錦之丞は，「眼科病類表」を発表し，須田哲造，井上達也，安藤正胤，桐淵光齋らと眼科専門研究会を結成しました。さらに，梅の指導によって，明治18年（1885年），輸入されたコカインを用いた眼科手術を始めたともいわれています。このように梅 錦之丞は，実質的には，日本人最初の眼科における「教授」としての活躍を精力的に開始しました。ところが，傷ましいことに，梅 錦之丞は病に倒れ，明治18年（1885年）12月に退任し，その後程なくして，宿痾の結核が増悪して，明治19年（1886年）4月，命尽きることになるのです。梅 錦之丞が他界したのは，28歳（文献によっては享年29歳）という若さでした。

梅 錦之丞という人の私生活

そもそも梅家の始まりは，「眼科醫家人名辞書」（奥沢康正，園田真也共編著：思文閣出版）によると，出雲国加茂村の外科医梅木氏の次男道竹で，若くして長崎に遊学し，本川道悦の門下として外科を修め，安永5年（1776年）に故郷で分家して，梅の姓に改め，松江城下で開業したそうです。その後，男系が途絶えた梅家に養嗣子として入ったのが，医師井沢氏の次男，

芳雪（後日，薫と改めた）であり，これが梅 錦之丞の父となります。前述のごとく安政5年（1858年），薫が25歳の時に，長男である錦之丞が誕生し，その二年後，万延元年（1860年）に，次男謙次郎が生まれます。ちなみに次男の謙次郎は，後年，「日本民法法典の父」と呼ばれる程の高名な法学者として大成し，帝国大学法科教授，東京帝国大学法科大学長，内閣法制局長官などを歴任しています。梅兄弟の経歴を見ていると，彼らが優れた家庭環境と資質に恵まれていたことを察することができます。実際に，兄弟は，幼少期より俊英をもって知られておりました。

錦之丞の公的な経歴を見ると，一見，堅実で順風満帆な学者人生を歩んでいたように見えますが，実はそうでもないようです。東京に転じた後，梅家は窮乏のどん底で喘ぐことになります。梅 錦之丞の母は，小商いで辛うじて一家の生計を立てていたといわれますが，その困窮の果てに，病に倒れてしまい，兄弟の成人を見ることなく他界しました。官費学生に対する給費によって，困窮を極めた生活の中でも，なんとか勉学を断念せずに済んだようです。そして，第一回の官費留学生としてドイツに渡るのですが，この際にも，実は貧困のために一旦は留学を辞退したという逸話が残っています。軍医総監石黒忠悳が事情を聞いたところ，梅 錦之丞は借財があって留学できないと述べたので，石黒総監が借財の一部を肩代わりすることで，なんとか留学をすることができたというのです。ただ，梅 錦之丞が，貧困の中でも勉学一筋を貫いた聖人君子かというとそうでもなさそうです。彼は，独身の身で，酒を好み，生活が乱れたことが病のきっかけであったともいわれているのです。またドイツ留学中は，ドイツ婦人との間に子をもうけたことが知られています（「眼科醫家人名辞書」）。

帝国大学成立期の外国人教師の位置づけ

帝国大学の成立期，ヨーロッパから伝播された西洋医学は，来日した外国人の教師陣によって指導されておりました。特に有名であったのが，プロシアのミュルレル（Benjamin Carl Leopold Müller）であり，外科医であった彼が眼科学を兼任したことで，東京大学における眼科教育の嚆矢となります。その後，同様に，東京大学の外科学教授となったシュルツェ（Emil August Wilhelm Schultze），スクリバらが眼科学を兼任していました。これらの外国人教師に指導された中で名を馳せた眼科医が，梅 錦之丞，須田哲造，井上達也などでした。

この時代の事情を詳細に論述した文献として，天野郁夫（広島大学大学教育研究センター）「日本のアカデミック・プロフェッション―帝国大学における教授集団の形成と講座制―」（大学研究ノート 30：1-45, 1977年6月，広島大学）があります。以下の文章は，この文献からの引用です。「東京開成学校が東京大学と改称し，東京医学校をあわせて法・理・文・医の4学部をもつ，わが国最初の近代大学として発足したのは明治10（1877）年のことである。この発足当初の大学には，法理文3学部に邦人教授4，助教3，「外国教授」17，医学部には教授5，助教7，「外国教授」11からなる教授集団があった。この数字が示しているように，この最初の近代大学は，その教育スタッフを欧米諸国から招聘した「外国教授」に大きく依存して発足した。のちに詳細にみるように，発足時の「邦人教授」のアカデミック・キャリアからすれば，その「外国教授」への依存度は，「全面的」というべきかも知れない。東京大学＝帝国大学における教授集団の形成過程は，そうした「外国教授」依存の教育体制からの脱却―かれらにかわるに十分な，西欧の近代学術の学習を経た「邦人教授」層の創出の過程として始まる。」

梅 錦之丞にとっての留学とは？

同文献に，梅 錦之丞の名が出てきます。西南戦役に附随した財政的疲弊によって，断絶していた官費留学生制度については，文部省が「留学生ヲ海外ニ派遣スルノ理由」という書面を正院（正院とは明治初期の廃藩置県後に発布された太政官職制の最高機関で，従来の太政官に相当します）に提出しています。「それによると「留学生派遣ノ挙ハ遂ニ廃棄ニ付セス若干ノ人員ヲ限リテ暫ク此一路ヲ存シ」，東京大学の「卒業ニ属セル倚輩中最俊秀ナル者ヲ遴選シテ海外ニ派遣シ各其専門ニ従事セシメ熟達ノ時来其所蘊ヲ齎ラシテ帰朝スルニ及テハ従前外国人ノ一夥ニ拠有セシ教学ノ地位ヲシテ逐次邦人ノ占断スル所」とするならば「我大学独立ノ精神ヲ振作シ更ニ昭代ノ文運ヲ賛助スルノ効績ヲ見ルニ至」るのみならず，「大学教員ノ地位」を「専ラ外国人ニ倚頼」することによる多額の財政的負担の軽減もまた可能となる。いいかえれば，海外留学制度は，大学教授の養成という一点にしぼることによって，その存続の正当性が立証されることになったのである。こうして，明治12年，海外留学生の派遣は再開の運びとなり，5月には清水郁太郎，梅錦之丞，新藤二郎（以上医学，独），河上謹一（法学，英），高松豊吉（化学，英），石黒五十二（土木工学，英），寺尾寿（物理学，仏）の7名が送られた。彼らはいずれも，東京大学の卒業生であり，医学専攻の3名は明治12年，他の4名は明治11年に大学を卒業している。」さらに，医学士となる3名について引用を続けると，「3人の留学生は同年30人の卒業生中の席次によると，清水が首席，新藤が3番，梅は8番をしめ，それぞれ産婦人科，病理学，眼科学の専攻を命じられた。それは将来の教育研究体制の拡充をめざした，きわめて計画的な留学生派遣であった」（天野郁夫「日本のアカデミック・プロフェッション—帝国大学における教授集団の形成と講座制—」）。

天野郁夫による詳細な記述を読むと，帝国大学成立期は，卒業生の中から成績優秀者を選抜して，留学させ，帰国後に帝国大学における教授集団の中核を形成するようになったことが明確に理解できます。そして梅 錦之丞は，そのエリート集団の先駆者であったのです。しかし，国の期待を背負っての刻苦勉励の生活は，彼らにとっては辛い重荷であったのかもしれません。第一回文部省官費留学生の三人の後日談を調べると，いずれも当初の志を遂げることなく終わっています。酒井シヅ監修「医界風土記 中国・四国編」（思文閣出版）によると，新藤は，病を得て中途帰国，病理学への志は結実せず，内科医として一生を終えました。梅，清水は若くして病没しました。梅 錦之丞の生涯は，既に記述しましたが，清水郁太郎の生涯も酷似しています。帰国後，東京大学講師として当時ベルツ（Erwin von Bälz）が兼任していた産科婦人科学の専門教員となり，その後，日本最初の産科婦人科学担当大学教授となって，新知識を駆使した教育と診療において，怒濤のような活躍を始めるのですが，やはり結核で倒れ，教授在職8か月，彼もまた29歳に満たざる若さでの死を迎えたのでした。

帝国大学の黎明期に活躍したこれらの俊英の若さとその余りにも早く迎えた死去に驚かされますが，その後，国費留学によるアカデミック・キャリアを駆け上った先駆者達が日本人教授として帝国大学に定着していったことで，限定された大学教授のポストはすぐに飽和していきます。その後は，全国に設置された大学を含めて，現在の形態に近いアカデミアのキャリアパスが完成されるのです。

おわりに

梅 錦之丞が他界した明治19年(1886年)，東京大学は帝国大学となり，東京大学医学部が帝国大学医科大学と改称された年にあたります。梅 錦之丞が日本近代眼科の黎明期に，指導的立場で活躍できたのは，20歳台後半のわずか2年間に過ぎませんでした。梅 錦之丞の死去後，ドイツ留学から帰国した河本重次郎が，31歳で帝国大学の初代眼科教授と任ぜられ，眼科学主任を命ぜられたことで，「日本近代眼科の父」として君臨することになるのです。河本重次郎が長寿を全うして，30数年の長きにわたって帝国大学眼科教授という絶対的な権威によって，眼科界を統率したことを考え併せると，ふたりに与えられた活動期間の長短における隔絶に切ない感傷を覚えます。ちなみに，河本重次郎が留学したのは，梅 錦之丞の6年後にあたる明治18年であり，同年に国費留学している3名のうちのひとりが梅 錦之丞の弟，謙次郎(法学)でした。明治期の平均寿命は40歳程といわれますが，これは乳幼児期の死亡率が高いためで，成人した日本人の平均寿命は60歳前後でした。もし天が，梅 錦之丞に健康と長寿を与えていれば，当時の国費留学制度が有していた国策上の使命と帝国大学の位置づけを思うと，本来であれば，彼が初代の帝国大学眼科教授となり，日本眼科界を指導していたはずです。しかし，そのような想像は，詮無い空想を弄しているに過ぎません。厳然たる史実として，梅 錦之丞は短命に終わり，彼が夢見たであろう日本近代眼科の創設と発展という偉業は，河本重次郎に託されました。直後に出現した河本重次郎の圧倒的な存在感の輝きによって，梅 錦之丞の短い生涯は，太陽の光でかき消される明けの明星のような印象を与えます。あるいは，一瞬ではあるけれど燦然とした煌めきを放ちつつも，すぐに闇夜の中に消えてしまった流星のようであると比喩すべきなのでしょうか。いずれにせよ，梅 錦之丞の短い生涯とその無念に思いを馳せて，擱筆とさせて頂きます。

(本企画では，歴史上の事柄を，できるだけ一次史実を引用して記載したいと思いますので，原則として敬称略とさせていただきますことをお断りしておきます。)

〔谷原秀信：熊本大学大学院生命科学研究部眼科学分野〕

*　　*